

第30回

# 小学館 ノンフィクション大賞

最終選考結果のお知らせ

大賞

『力道山未亡人』

細田昌志（ほそだ・まさし）

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』2誌主催による『第30回小学館ノンフィクション大賞』の最終選考会を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は大賞に『力道山未亡人』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として300万円が贈られます。受賞を祝う会は、単行本刊行に合わせて執り行う予定です。

## PRESS RELEASE

2023年12月18日

### 第30回「小学館ノンフィクション大賞」最終選考結果のお知らせ

主催：株式会社 小学館 週刊ポスト／女性セブン

大賞

## 『力道山未亡人』

細田昌志（ほそだ・まさし）

#### 【梗概】

戦後復興のシンボル、プロレスラーの力道山が他界して、今年で六十周忌を迎える。生誕一〇〇年を数える来年は、盛大な催しが、いくつか、計画されているとも聞く。

その力道山の妻だった田中敬子は、八十歳を越えた今も、テレビやラジオ、講演に忙しく、亡き夫の思い出を語り歩いている。

横浜市生まれ。少女時代から学業優秀で、高校卒業後、発足間もない日本航空の客室乗務員となった彼女は、誰もが知るスーパースターに見初められ、二十二歳で結婚。死別後は、現在まで独り身を通してている。

「力道山の妻」「力道山夫人」として田中敬子が語る夫のエピソードは、筆者にとって、どこかで聞いたような話ばかりで、さほど、関心が沸かなかった。それが、一転して興味の対象となったのは、六十年間、再婚しなかった事実に意識が及んだことに由来する。結婚生活は僅か半年、二十二歳の若さだったならば、常識的に考えて、再婚という選択肢はあったはずだからだ。

六十年間の長すぎる後半生に興味を掻き立てられ、筆者は、まったく面識のない田中敬子について調べるようになった。資料を集め、証言を取った。意外な事実をいくつも知った。程なくして「敬子さんを紹介する」という人が現れ、慌ただしく、本人取材も始まった。

特に筆者の眼を惹いたのは、夫の死の直後、彼女が置かれた境遇である。五つの会社の社長に就任し、三十億円もの負債を背負い、莫大な相続税を払い続け、四人の子の母親となった。それらは「力道山夫人」から「力道山未亡人」に変遷したことで身に降りかかってきた障碍であり、これまで、彼女の口から語られたことは、ほとんどなかった。

## PRESS RELEASE

2023年12月18日

取材は、必ずしも円滑に進んだわけではない。「知らない」「憶えてない」と逃げられることも少なくなかった。とすると、当方も新たな証言を求め、資料を渉猟しながら、事実を追い、煩雑な人間関係を整理するほかなかった。

本書は「力道山の妻」「力道山夫人」として語られる、通り一辺倒の回顧録とは異なる。「力道山未亡人」として好奇の視線に晒され、男性社会の洗礼を浴び、プロレスという特殊な業界に翻弄されながら、昭和・平成・令和と生きた、一人の女性の数奇な半生の記録である。

### PROFILE | 細田昌志 (ほそだ・まさし)

年齢：52歳

住所：東京都

職業：ノンフィクション作家

1971年、岡山県岡山市生まれ、鳥取県鳥取市育ち。鳥取城北高校卒業。1997年からCS放送で格闘技番組のMCに。その後、放送作家にシフトし『5時に夢中!』（東京MX）『e-station』（J-WAVE）等を担当。近著『沢村忠に真空を飛ばせた男／昭和のプロモーター・野口修評伝』（新潮社）が「第43回講談社本田靖春ノンフィクション賞」を受賞。

## 『小学館ノンフィクション大賞』 について

### 『小学館ノンフィクション大賞』とは？

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登竜門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『絶対音感』（第4回）、『マグロ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）、『小倉昌男 祈りと経営』（第22回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。

募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢を問いません。

## PRESS RELEASE

2023年12月18日

30回を数える今回は、本年8月末日に募集を締め切り、100を超える力作が寄せられました。この中から次の4作が、本日、小学館（東京・千代田区）で開かれた最終選考にかけられ、星野博美、白石和彌、辻村深月の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

### 最終候補作

#### 『他人の手帳は密の味』

#### 1700冊の使用済み手帳に、現代人は「何」を書いてきたか』

志良堂正史（しらどう・まさふみ）

#### 『143人の「死にたい」』

古田雄介（ふるた・ゆうすけ）

#### 『捕鯨サイカイ』

山川徹（やまかわ・とおる）

#### 『力道山未亡人』

細田昌志（ほそだ・まさし）

※タイトル五十音順

賞金 大賞 = 300万円（複数受賞の場合は分割）

発表 受賞作は単行本として刊行予定です。

選考委員 星野博美（ノンフィクション作家）、白石和彌（映画監督）、辻村深月（小説家）

※受賞を祝う会は、単行本の刊行に合わせて執り行う予定です。